

ニュースレター



北海道大学 高等教育推進機構

Newsletter No. 112

- TA研修会開催される—257名が修了— (8ページ)
- 北海道大学入試改革フォーラム2018を開催 (15ページ)
- 平成30年度夏季休暇中における「全学インターンシップ」
を実施中 (18ページ)
- CoSTEP, アドビと初の連携授業「デザインスキル演習」
を実施 (19ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

NITOBEducationシステムの現在位置

副学長 (NITOBEducationシステム担当) 山口 淳二

「NITOBEducationシステム」は、平成26年度、北海道大学が文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業に申請するにあたり、既に開校されていた学士課程特別教育プログラム「新渡戸カレッジ」と翌年度開校予定の大学院特別教育プログラム「新渡戸スクール」という2つのプログラムを総称したものです。両者に共通する特徴としては、(1)高度の英語力と高いコンピテンシー（人間力、生きる力）の育成、(2)アクティブラーニングを駆使した主体的に学ぶ力の確立、(3)修学ポートフォリオを活用した学びと指導の可視化と効率化、(4)同窓会ネットワークを活用した教育・キャリア支援、等があります。

私は、カレッジについては創設時から関わっていましたが、昨年度より新渡戸スクールでも副校長と

なり、現在両者を取りまとめる立場にあります。

そこで、この紙面をお借りして、カレッジとスクールの現状について簡単に紹介させていただきます。

新渡戸カレッジ

新渡戸カレッジが創設されてから、6年が経ちました。皆様もご存知のように、「新渡戸」は、札幌農学校第2期卒業生である新渡戸稲造に由来し、彼の多彩かつ国際的な活動にちなみ、本学におけるグローバル人材の育成を目指して名づけられました。

英語の能力試験により、本学全12学部の学生の約8%にあたる200名を選抜し、従来の学部教育に加え、新たなカリキュラムに基づいた教育を実施してきました。

新渡戸カレッジでは、《海外留学の必修化》と本学同窓生である《フェローによる教育実践》の2つが創立当初よりの大きな特徴でした。カレッジにおいて制度化された海外留学科目単位の必修化は、大学の国際化のための「日本人学生の海外留学数」や「授業科目の英語化の促進」といったスーパーグローバル事業申請時に本学が定めた数値目標を達成するための苦し紛れの手段でもありました。とはいえ、海外留学を意識することにより、多くのカレッジ生は、その準備として英語学習に積極的に取組み、また、外国での異文化体験を契機とした「気づき」は、自己省察を経て、その後の各人の意識改革と生活態度の改善に繋がっています。今後その教育効果について真摯に検討する必要がありますが、現時点では一定の評価を与えてもよいと思っています。

カレッジ生に対するフェローの影響力も大きいものでした。フェローとの6年間の協働作業を契機として、新渡戸カレッジでは本学同窓会組織（校友会エルク）と連携した教育プログラムの開発が急速に進みました。当初から実施していた「対話プログラム」(カレッジ生とフェローとの一対一での話し合い)の充実だけでなく、平成28年度より開始した「フェローゼミ」や今年度その先を見据えた新たな教育プログラムも既に実施し始めています。

平成29年度から新渡戸カレッジは第二期となり、体制を刷新し、教育プログラムとしても更なる進化を図っています。

新渡戸スクール

本学の全ての大学院生を対象として、新渡戸スクールは平成27年4月に開校しました。初年度は主に修士課程の学生を対象に基礎プログラム（定員60名）を実施しました。平成29年度からは、基礎プログラム生の定員を120名に増やし、また博士課程の学生を対象とした上級プログラム（定員25名）を開始しました。同時にこの年よりスクールの全ての授業を完全に英語化し、今年度は入校選抜時において英語能力試験の導入を図りました。

スクールの最大の特徴は、日本人学生と留学生と

の共修環境の構築にあります。私たちはこれを《国際社会の縮図》の実現と称しています。ほぼ全員が日本人学生からなるカレッジと異なり、スクール生の約1/3は留学生からなり、授業中のチーム内の発言も全て英語です。ですので、最初、日本人学生は「寡黙」がちです。とはいえ、時間が経つにつれてその状況を打破して積極的に発信する学生も増え、文字通り互いに切磋琢磨する状況が出現します。更には、プロジェクト・マネジメント手法の導入をはじめとする先進的な授業内容、独自の新渡戸ポートフォリオを用いた修学支援、30歳代の社会人によるスクール生との交流を意図したメンター制度等、スクールでは今後の本学の教育の将来を先取りした数々の試みがなされています。これらの授業については、次号において詳しく紹介する予定です。

NITOBÉ教育システム

北海道大学は、創基150周年に向けて制定した「北海道大学近未来戦略150」において、「専門的知識に裏付けられた総合的判断力と高い見識、並びに異文化理解能力と国際的コミュニケーション力を有し、国際社会の発展に寄与する指導的・中核的な人材を育成する」ことを教育の基本理念として定めました。新渡戸カレッジとスクールは、その実現を模索するための試行の場と位置づけられます。両組織の活動はともに選抜された学生を対象としていますが、そこで確立された優れた教育手法や制度については、将来本学の学生全員が享受できるように全学への普及に努めていく必要があります。私もこのことを肝に銘じて進めていくつもりです。

カレッジとスクールは、本稿の最初に示したように共通の目標を持ちながら、しかし、独自に進化してきたものです。そして来年度には両者を統合し、学部-大学院を通貫した包括的な教育実施組織への刷新を図るべく、現在その検討を進めています。

両組織の現在までの試行錯誤も含めた進化の過程を総括する意図で、《NITOBÉ教育システムの現在位置》について具体例を示しながら本号より3回に分けて紹介させていただく予定です。

まずはカレッジ教頭の弐和順教授より、「新渡戸カレッジの新たな取組」(p.3)と題した新渡戸カレッジ第二期体制についてご紹介いただきます。また、内田治子特任准教授による前述の対話プログラムに

ついでに紹介記事「新渡戸カレッジのメンタリング・プログラムへのSpeed Mentoringの導入」(p.5)

も本号に掲載されています。あわせてご覧いただけましたら幸いです。

高等教育推進機構 Institute for the Advancement of Higher Education

新渡戸カレッジの新たな取組 —第二期プログラムの内容と特色—

(1) はじめに

学士課程特別教育プログラム「新渡戸カレッジ」は、平成25年(2013)4月に創設され、今年度、6年目を迎えました。本学12学部の学生を対象とした学部横断的なプログラムで、通常の学部教育と並行して、独自に設計されたさまざまな授業の履修や各種行事への参加を通して、幅広い知識の修得のみならず、豊かな人間性をはぐくみながら、品位ある自律的な個人の育成、それぞれの文化的・社会的に根ざしたアイデンティティの確立、あわせて国際性とリーダーシップの醸成をめざしています。

このプログラムは、その名称からも知られるとおり、札幌農学校第二期生である新渡戸稲造の高い精神性と真摯な活動を一つの規範としています。その新渡戸の精神を継承すべく、他大学ではあまり類例のないのが、フェロー制度です。フェロー制度は、フェローという本学の卒業生が中心となって、カレッジ生のよき理解者・助言者としてそれぞれの成長を見守りながら、教育支援するもので、現在、36名が担当しています。

さて、「新渡戸カレッジ」では、昨年(平成29年)3月に、所定の要件を充たした修了生15名をはじめて送り出しました。それを受けて、初年度からの4年間のプログラム内容などを点検・評価するとともに、平成29年度から新たに実施するプログラムを第二期と名づけ、その改善を図りました。ここでは、「新渡戸カレッジ」第二期プログラムにおける具体的な取組内容について、記します。

(2) 第二期プログラム

いま述べた「新渡戸カレッジ」第二期プログラムですが、その内容はすべてを一新したものではありません。

創設当初より掲げられてきた教育理念と目標に変更はなく、フェロー制度も、そのままの形で継承しています。

その一方で、従来のプログラムは、基本的に大学入学時から卒業時までの4年間ないしは6年間の大枠のもとで、教育が行われてきましたが、第二期では、入校後の1年目を「基礎プログラム」、その後の2年目以降を「オナーズ・プログラム」と区別し、二段階のプログラムに再編しました。

その理由は、いままでのプログラムでは、学生の科目選択の自由が確保されていたものの、その間、どの時期に海外留学するかを含めて、授業科目の計画的な履修が難しいこと、またカレッジ生同士の一堂に会して学修する機会が少なく、カレッジ生としてのアイデンティティを築きたいこと、さらに高年次になってからカレッジ生としてのモチベーションを維持するのが困難であることなどの問題点が指摘されてきたからです。そうした課題を解決するために、たとえば、必修の授業科目を設け、基本的な姿勢やその考え方を伝達することによって、カレッジ生の内的動機づけを高める工夫をこらしました。

(3) 基礎プログラム

まず、「基礎プログラム」ですが、入校に当たって、4月に1年次および2年次学生を対象としたTOEFL-ITPを用いたプレイスメントテストを実施し、その結果、500点以上の成績を目安にして仮入校生を決定します。仮入校後は、従来どおり、英語によるコミュニケーション能力の向上、留学時に必要なアカデミックスキルの修得をめざして、全学教育科目の「英語演習(上級)」の中で「留学支援英語」(2単位)を必修としています。

また、第二期プログラムでは、第一学期の全学教育科目の特別講義「グローバル基礎科目」(春ターム・夏ターム)(2単位)を新設し、必修化しました。この授業は、学生にリーダーシップの重要性と国際社会の理解を促すもので、その履修を通して、大学入学以前の知識獲得を中心とした学習から、明確な目的意識をもって能動的な学習の必要性を自覚することへの意識転換を図ることを目的としています。



写真1 グローバル基礎科目の様子

こうした必修の授業に加えて、「新渡戸カレッジ」主催の各種行事などへの参加を通して、一定数の新渡戸カレッジポイントを取得した学生に対して、10月から正式入校を認めるようになりました。

それに続く第二学期では、「新渡戸カレッジ」独自科目である「新渡戸学(フェローゼミ)」(1単位)の履修を必修にしました。このゼミは、フェローが中心となって実施するもので、たとえば、都市問題、環境問題、観光問題など、各々設定されたテーマに即して、チームごとに札幌近郊の施設などを現地視察した上で、チーム内で解決策を議論すると



写真2 新渡戸学(フェローゼミ)の様子

もに、最後に全員の前でプレゼンテーション発表を行うものです。こうした作業を通して、チームワーク力やプレゼンテーション力の養成を図ります。

このゼミが終了する第二学期末の段階で、上記の必修科目5単位以上の認定を受け、さらに一定数の新渡戸カレッジポイントを取得した学生が「基礎プログラム」を修了することができ、その修了証と「新渡戸カレッジ・アソシエイト」の称号が授与されることになりました。

(4) オナーズ・プログラム

入校後、2年目からはじまる「オナーズ・プログラム」は、「基礎プログラム」を修了した学生のうち、さらに自ら進んで積極的な学習を希望するカレッジ生を対象としたもので、コミュニケーションツールとしての高度な英語力を活かしながら、さまざまな授業の履修と各種行事への主体的な参加を通して、グローバル社会で真のリーダーとして活躍できる能力の養成をめざすものです。その中で、特に重要視するのが、同プログラム唯一の必修科目である「海外留学」への挑戦です。いままで「海外留学」というと、「新渡戸カレッジ」においても、まずは「海外留学」ありきの風潮がありましたが、第二期プログラムでは、入校時から「海外留学」の意義と目標をみずから考えて、計画的な留学を設計するように指導するとともに、それぞれの目的に応じたタイプ別のプログラムを用意するように改めました。そうした中で、交換留学、短期留学スペシャル、国際インターンシップなどのプログラムの支援を行っています。とりわけ、「国際インターンシップ」(海外の企業における研修などを通して総合的な人間力を培う実践的な教育プログラム)は、第二期から「海外留学」の中に位置づけ、校友会やフェローの協力を得ながら、確実に成果を挙げつつあります。

「オナーズ・プログラム」では、その他にも、新渡戸カレッジ独自科目として、「セルフキャリア発展ゼミ」(自身の将来を構築する力を養うとともに、今後求められる創造力を磨くためのゼミで、宿泊型の研修を含むもの)、「アドバンスト・フェローゼミ」(アカデミックスキルの鍛錬とグループでの協働作業を通して、リサーチ力・コミュニケーション力などの修得を目標とするゼミ)を新設しました。

さらに、従来、行われてきた「対話プログラム」

(フェローとの1対1の対話を通して、その国際感覚や経験を学び、みずから思考力・行動力・判断力などを養うプログラム)については、改善を図りながら、引き続き実施しています。

なお、「オナーズ・プログラム」においては、所定の授業科目を履修して6単位以上を修得すること、加えて、所属学部での卒業認定ならびに通算GPAが所属学部等の最終年次学生のうち上位50%以内で

あること、また英語能力TOEFL-iBT80点相当以上であることの要件を充たした学生に対して、表にあるとおり、3段階の称号が授与されますが、この基準については、創設当初より変更はありません。

表1 新渡戸カレッジ 3段階の称号

基準	称号
通算GPAが上位15%以内 英語能力TOEFL-iBT 100点相当以上	新渡戸カレッジ Summa cum Laude (= with highest honor)
通算GPAが上位30%以内 英語能力TOEFL-iBT 90点相当以上	新渡戸カレッジ Magna cum Laude (= with great honor)
通算GPAが上位50%以内 英語能力TOEFL-iBT 80点相当以上	新渡戸カレッジ Cum Laude (= with honor)

(5) おわりに

「新渡戸カレッジ」では、例年どおり、7月から9月にかけて、12学部を訪問し、関係教職員と意見交換しながら、各学部におけるカレッジ生の学修状況を確認するとともに、カレッジに対する要望などをうかがっています。そうした機会を通して頂戴した貴重な意見を踏まえつつ、今後「新渡戸カレッジ」をよりよい方向へ進めていきたいと考えています。所期の目的を達成すべく、特別教育プログラムならではの特性を活かしつつ、日々改善を図っていきますので、引き続き、ご支援ご協力のほど、よろしく願いいたします。

(弐 和順 新渡戸カレッジ教頭)

新渡戸カレッジのメンタリング・プログラムへの Speed Mentoringの導入

Speed Mentoring導入の背景

新渡戸カレッジでは、2015年度より「対話プログラム」というメンタリング・プログラムを実施しています。対象は1年以上カレッジに在籍する学生で、希望者は年度始めに登録することで、年4回(4月、7月、11月、1月)のセッションへの参加資格を得ます。メンターはカレッジの同窓生フェローの一部(今年度は11名)が務め、毎回事前に予約をした学生と一対一の面談を行います。

一般的なメンタリング・プログラムと同様、本プログラムでも、希望すれば、学生は特定のメンター(「主担当」とよびます)と年間を通して継続的に会うことができます。同時に、学生は主担当以外のメンターとも一対一で話す機会(「オープン対話」と呼びます)を持つことができます。面談は原則として学内で行います。

特定のメンターと定期的に対話を行うことで、「計画を持って実行し、結果を客観的に振り返ることができた」、「自分自身や進路について異なる視点

から捉えた上で決断を下すことができた」、「一つのトピックについてさまざまなメンターと話すことで、多様な観点があるのに気づき、視野を拡げることができた」等、さまざまな効果がアンケート、インタビュー、レポートなどを通して参加学生から報告されています。また、これまでのカレッジ生の記録を通して、対話プログラムに継続的に参加した学生の多くが、積極的にカレッジのプログラムに参加し、成功裏にカレッジを修了していることが示唆されています。これらの効果を、学内の教育情報システム(ELMS)やポスター掲示、学生間の情報共有などさまざまな手段で周知しているにも関わらず、毎年新しく参加する学生は対象となるカレッジ生の3割程度で、そのうちの約半数が一度きりの参加にとどまっています。

学生が継続的に話したいと思うメンターと出会える機会を増やすこと、また、多様なメンターの知見や経験に触れ、有意義な時間を過ごすことを狙いとして、今年度の1回目のセッションに「Speed Mentoring」

の手法を導入しました。Speed Mentoringは、メンターとメンティが短いスパンでペアとなり、あらかじめ準備した内容について話し合うもので、Rabbi YaacovとSue Deyoniyoriにより導入された「Speed Dating」(Finkel & Eastwick, 2008)に派生するものです。Speed Datingでは、新しいパートナー候補と出会うという明確な意志を持った人が集まって、様々な相手と3-8分間ずつの短い会話をします。ひとは30秒から3分間の短い観察を通して社会行動上の判断(付き合っただいかどうか)を正しく下すことができます(e.g., Ambady, Bernieri, & Richeson, 2000; Berk, Berg, Mortimer, Walton-Moss, & Yeo, 2005)。メンティが相性の合うメンターを得ることは、充実したメンタリングを行う上で重要です(Jackson et al., 2003)。メンティが限られた時間内に相性の合うメンターを見つける上で役に立つSpeed Mentoringは、医療、公衆衛生、ソーシャルワークなど、さまざまな分野のメンタリング・プログラムの開始時に実施されています(Cellini, Serwint, D'Alessandro, Schulte, & Osman, 2017; Cook, Bahn, & Menaker, 2010; Laprise & Thiver, 2012; Leonard et al., 2015; Peña-Purcell, 2013; Serwint, Cellini, Spector, & Gusic, 2014)。

過去の研究報告に基づき、次の2つの効果を期待して、本プログラムの開始時にSpeed Mentoringによるセッションを実施しました。

1. 参加した学生は、知りたい情報や新しい考え方などを得、高い満足度を示す。
2. 2回目以降も参加する学生の割合が例年より増加する。

Speed Mentoring (「ミニ対話」) の実施

2018年4月21, 22日の両日、Speed Mentoring (「ミニ対話」という名称を付けました)を実施しました。新渡戸カレッジ生57名(男26名, 女31名)が参加し、学生の希望をもとにあらかじめ筆者の組んだスケジュールに沿って2名以上のメンターと20分ずつ個別の対話を行いました。

限られた時間を最大限有効に活用できるよう、筆者は事前に自己紹介文と話したい内容を学生から取り寄せてメンターに送り、準備を依頼しました。同時に、学生が閲覧できるよう、フェローの自己紹介資料(文書とビデオ)をELMSに掲載しました。

1日目は全員参加のオリエンテーションと懇親会との間の6枠(120分)、2日目は18枠(360分)を設け、20分毎に廊下でベルを鳴らして、対話の終了と学生の教室移動を促しました。

前述の効果1(ミニ対話への満足度)について調べるため、学生には、予定したすべてのミニ対話の終了後、筆者の作成した、対話内容や時間等についての満足度や今後の参加の予定などを問う項目からなる調査票に回答してもらい、そのうち今年度新しく参加した学生の分を抽出して調べました。また、効果2(2回目の参加度)については、1回目に参加した今年度からの参加者のうち、2回目のセッション(7月7・8日実施)に申し込んだ人数を調べ、割合を算出しました。

Speed Mentoring (「ミニ対話」) 実施の結果

参加学生のうち、初めての参加者は47名(2年生19名, 3年生28名)で、ひとりあたり平均3.6名のフェロー(min. 2 ~ max. 10, 標準偏差2.0)と対話をしました。

満足度については、調査票に8つの項目を設け、それぞれについて「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」のうち自分の気持ちに最も近いものを選んでもらいました。

表1に示すとおり、多くの学生が、「今後継続して話したい人を見つけられた」(95%), 「相手のフェローの特徴がよくわかった」(95%), 「相手のフェローと相性があうかどうか判断できた」(86%)という項目に肯定的に答えたことから、学生にとって、対応したメンター(フェロー)の特徴や自分との相性を知る上でミニ対話が役立ったことがわかりました。実際、ひとは短い時間で相性を判断することができるというSpeed Datingに派生するSpeed Mentoringについての過去の研究を支持する結果となっています。また、Speed Mentoringが、メンティにとって、多様なメンターから有益な情報を得られる重要な機会となりうることを示した過去の研究(e.g., Cook et al., 2010; Peña-Purcell, 2013)と同様、「知りたかったことを十分知ることができた」(88%), 「多様な視点や考え方に触れられた」(98%), 「多くの情報を得られた」(81%), 「他の人にも奨めたいと思った」(95%)の項目についても多くの肯定的な反応が得

表1 Speed-Mentoring (ミニ対話) の成果

	そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
①	25 (58.1)	16 (37.2)	2 (4.7)	0 (0.0)
②	12 (27.9)	26 (60.5)	5 (11.6)	0 (0.0)
③	29 (67.4)	13 (30.2)	1 (2.3)	0 (0.0)
④	20 (46.5)	15 (34.9)	8 (18.6)	0 (0.0)
⑤	29 (67.4)	12 (27.9)	2 (4.7)	0 (0.0)
⑥	19 (44.2)	22 (51.2)	2 (4.7)	0 (0.0)
⑦	7 (16.3)	22 (51.2)	13 (30.2)	1 (2.3)
⑧	12 (27.9)	25 (58.1)	6 (14.0)	0 (0.0)

() 内は新しい参加者の有効回答数 (N=43) 中の割合 (%) を示す

- ①今後継続して話したい人を見つけられた
- ②知りたかったことを十分知ることができた
- ③多様な視点や考え方に触れられた
- ④多くの情報を得られた
- ⑤他の人にも褒めたいと思った
- ⑥相手のフェローの特徴がよくわかった
- ⑦相手のフェローに伝えたいことを十分伝えられた
- ⑧相手のフェローと相性があうかどうか判断できた

られました。

一方、「相手のフェローに伝えたいことを伝えられた」についての肯定的な回答は68%にとどまりました。理由として、「時間が限られたため、自分のことをあまり話せなかった」、「フェローによっては一方的に話を聞いて終わった場合もあった」等が自由記述の回答で挙げられました。

効果2「2回目以降も参加する学生の割合が例年より増加する」について調べたところ、新参加者の90%が今後も参加するつもりだと回答したにもかかわらず、実際に2回目も続けて参加したのは48%に過ぎず、昨年度(39%)より多いものの、一昨年度(46%)とほぼ同じだったことがわかりました(表2)。これは、Speed Mentoring実施直後は、ほとんどの参加者が今後もメンターとのつながりを保ちたいと回答するものの、実際にメンタリングを続けた例は少なかったという研究結果(Cook et al., 2010; Laprise & Thiver, 2012)と同じです。

表2 初めて参加し、2回目も参加した学生数

実施年度	2015	2016	2017	2018
1回目に参加	19	24	36	46
2回目にも参加	17 (89.5)	11 (45.8)	14 (38.9)	22 (47.8)

() 内は1回目の参加者のうち2回目も参加した割合 (%) を示す

関係性を保つかどうかは、メンティの意志と行動にかかっています(Cellini et al., 2017; Serwint et al., 2014)。より多くの学生が、ミニ対話を通して出会ったメンター(フェロー)と意欲的に対話を続けるようになるにはどうすれば良いか、今後さらに実践を通して研究を行う必要があります。

まとめ

新渡戸カレッジでは、カレッジで学ぶ学生が同窓生メンター(フェロー)と定期的に出て話すことのできる対話プログラムを実施しています。4年目の今年度は、はじめにSpeed Mentoringによるセッションを導入したところ、フェローの特徴や自分との相性を知ることができた、フェローから有益な情報を得られたなど、新しく参加した学生を含む多くが意義を認め、今後の参加への意欲を示しました。一方、新参加者のうち、2回目も参加した学生の割合はSpeed Mentoringを導入しなかった場合より増えたものの、期待したほどではありませんでした。いかにして学生の参加意欲をSpeed Mentoring後も保つことができるかが今後の課題となっています。

(内田 治子)

参考文献

Ambady, N., Bernieri, F. J., & Richeson, J. A. (2000). Toward a histology of social behavior: Judgmental accuracy from thin slices of the behavioral stream. *Adv Exp Soc Psychol*, 32, 201-271.

Berk, R. A., Berg, J., Mortimer, R., Walton-Moss, B., & Yeo, T. P. (2005). Measuring the effectiveness of faculty mentoring relationships. *Academic Medicine*, 80(1), 66-71.

Cellini, M. M., Serwint, J. R., D'Alessandro, D. M., Schulte, E. E., & Osman, C. (2017). Evaluation of a speed mentoring program: Achievement of short-term mentee goals and potential for longer-term relationships. *Academic Pediatrics*, 17(5), 537-543.

Cook, D. A., Bahn, R. S., & Menaker, R. (2010). Speed mentoring: An innovative method to facilitate mentoring relationships. *Medical Teacher*, 32(8), 692-694.

- Finkel, E. J., & Eastwick, P. W. (2008). Speed-dating. *Curr Dir Psychol Sci*, 17(3), 193-197.
- Jackson, V. A., Palepu, A., Szalacha, L., Caswell, C., Carr, P. L., & Inui, T. (2003). Having the right chemistry : A qualitative study of mentoring in academic medicine. *Academic Medicine*, 78(3), 328-334.
- Laprise, R. & Thiver (2012). Using Speed Dating Sessions to Foster Collaboration in Continuing Interdisciplinary Education. *Journal of Continuing Education in the Health Professions*, 32(1), 24-30.
- Leonard, K., Yates, J., Nanhoo, F., Mcleish, S., Little, J., St Louis, R., & Stewart, W. (2015). Speed Mentoring in Teaching and Learning: Young people with experience of the care system mentor social work students. *Social Work Education*, 34(6), 666-681.
- Peña-Purcell, N. (2013). A Speed Mentoring Experience for University Students in Public Health Education. *TPHA Journal*, 65(4), 29-35.
- Serwint, J. R., Cellini, M. M., Spector, N. D., & Gusic, M. E. (2014). The Value of Speed Mentoring in a Pediatric Academic Organization. *Academic Pediatrics*, 14(4), 335-340.

全学教育 GENERAL EDUCATION & 総合教育 FIRST YEAR EDUCATION

学務委員会報告

平成30年3月20日（火）に平成29年度第5回の学務委員会が開催され、以下の議題が審議されました。

議題1 総合入試入学者における移行先の決定について

例年と同様の移行手続きを行い、文系学部には100人、理系学部には1,049人、合わせて1,149人の移

行先が決定しました。最終的に移行先が決定しなかった学生に対しては、総合教育部長およびラーニングサポート室特定専門職員が面接を行い、結果として9人が留年することになりました。以上の結果について、学務委員会です承されました。

(白木沢 旭児 全学教育部長・総合教育部長)

教育評価 EDUCATIONAL EVALUATION

TA研修会開催される —257名が修了—

2018年度のTA研修会は、4月3日（火）に機構の大講堂を主会場として開催されました。全学教育を担当するTAに対しては、当該授業科目の担当教員によるオリエンテーションのほかに、事前に当該業務に関する適切なオリエンテーションが義務づけられています。本機構では、平成10年度からTA研修会を実施してきており、今回で21回目となります。今年度の全学教育におけるTA採用人数は、のべ

1,310名（対前年度比97.6%）です。のべ時間では35,864時間（97.8%）となっています。TA制度は広い意味の大学院教育の一環として導入された制度で、教育を学ぶための実地訓練（教育現場の体験）を行う制度ともみなされています。また、大学院学生は教員とともに学部教育に参加することによって、自分の専門についてより一層理解を深めるとともに、教育の現場において教えるとはどういうこと

かを理解することもできます。平成27年度から博士後期課程の学生を対象に導入されたTF制度の前段階としての意義もあります。

研修の目的は以下のように要約されます。

- 1) 大学教育の基礎を理解する
- 2) 全学教育の趣旨を理解する：目的、意義、全体での位置づけ
- 3) 専門教育に還元できない基礎的な教育技術、心

- 構え、教育理論について理解する
- 4) 担当する科目の内容と教授法を理解する
 - 5) TA相互の交流をはかる

分科会は12分科会になりました。なお、昨年度から参加者の便宜をはかるために、全体のセッションを午後のみとしたスケジュールに変更しました。この改編のためか、すべてを修了した参加者は3年前よりも大きく増加し、257名(前年度比96%)でした。

表1 平成30年度北海道大学全学教育TA研修プログラム

<p><全体会></p> <p>12:30 開会の挨拶 細川敏幸</p> <p>12:35 講演「北海道大学の全学教育について」 白木沢旭児(文学研究科)</p> <p>13:05 講演「TAとしての心得」 山本堅一(高等教育推進機構)</p> <p>13:35 TA体験談</p> <p>14:45 TAと教員のパネルディスカッション 司会：山本堅一(高等教育推進機構) 院生パネリスト：中村勇太(情報科学研究科) 片岡恋惟(メディアコミュニケーション研究科), 杉本圭吾(文学研究科)</p>	<p><分科会>15:00~</p> <p>(A) 一般教育演習</p> <p>(B) ラーニングサポート</p> <p>(C) 講義</p> <p>(D) 論文指導</p> <p>(E) 情報学</p> <p>(F) 英語IIオンライン授業</p> <p>(G) 英語II以外の英語の授業</p> <p>(H) 初習外国語(中国語以外)</p> <p>(I) 中国語</p> <p>(J) 心理学実験</p> <p>(K) 自然科学実験</p> <p>(L) 体育学</p>
--	--

修了後回収したアンケート総数は291で、修士233名博士57名でした(総和が総数とまらないのは記述がない回答があるため)。このうち93名はすでにTAを経験しています。(細川 敏幸)

も、その背後に教育に対する思いがあることで生きてきます。「そもそもどうあるべきか」という高次元で教育を考える機会となりました。(山田 邦雅)

各分科会の報告

A 一般教育演習

一般教育演習の分科会には38名の学生が参加しました。例年は、TAが授業で遭遇しやすい問題への対応法を検討するケーススタディーを行ってききましたが、今年度は一般教育演習TA綱領を作成するというテーマに挑戦しました。

一般教育演習は内容も授業形式も授業ごとに様々で、TAに一定の方針を布くことは困難です。一方、専門的な科目はやることが決まっており業務や方針を統一的に設定しやすくなります。

しかし、これは教養教育がどうあるべきかという大問題の縮図ともいえます。各グループは教養教育のありかたを探りながら一般教育演習のTAのすべきことを検討しました。

文章化されると月並みなものにみえがちな綱領

B ラーニングサポート

分科会Bでは、ラーニングサポート室(LSO)の学習サポートチューターの研修を行いました。研修には英語・物理・化学を担当するチューター予定者7名(うち新規雇用者2名)が参加しました。まず各自の自己紹介を行った後、最初の30分でLSOチューターとしての役割・心構え・厳守事項について説明しました。その後1時間は2つのグループに分かれ、アイスブレイクワークを行い、前年度チューターから寄せられた学習サポートにおける悩み等について意見交換を行いました。今回のアイスブレイクワークには、新規着任したLSO特定専門職員にも参加してもらい、チューターにとっては指導上における経験やアドバイスを聞ける良い機会になったと思います。

(城谷 大)

C 講義

最初に大講堂に集合しマニュアルを参考資料にして、細川のミニレクチャーによりTA制度の歴史と意味、シラバスの読み方、講義の基礎手法、グループ学習の手法を学びました。次に大講堂に6グループ、N282、N283にそれぞれ5グループを配置し、大講堂は細川、N282は三上と岩間、N283は飯田と亀野が担当し、グループ学習によるケーススタディを行いました。各グループはおよそ10名で構成され、総修了者数は106名でした。まず、アイスブレイキングによりグループ内の自己紹介と役割分担を確認し、「古新聞の使い方」でグループの動きを会得しました。次に「毎回TAと教員が事前に予定を確認する講義がTAの野田君の担当である。学期の終わり頃、教員が学生の学習に不安があるので『シラバスの到達目標や評価基準には書かれていない期末テスト』をしたいと提議した。野田君はどう答えるべきか。」など、6種類用意した起こりうるケースのうちの一つについて、どう対応すべきかをグループ毎に議論しました。各グループとも熱心に課題に取り組み、最後の発表では学生、教員それぞれにどう対応すべきかを場合分けして考えるなど、わかりやすい解決策が提示され、有意義な研修となりました。

(細川 敏幸)

D 論文指導

当分科会には、論文指導科目を担当する13名の大学院生が参加しました。最初に大学生にとって論文を書くということ、そしてそれを指導する際のTAの役割、指導方法や留意点、レポート採点に役立つルーブリック評価について簡単に説明しました。その後、自分たちが学部学生だった頃に書いた卒業論文執筆時に苦労したことや指導教員からどのような指導・助言を受けたかをワークシートに記入しました。そして、そういった経験を踏まえて、自分たちがTAとして接する学部学生に、どの様に指導すれば良いのか等について3、4名のグループで話し合い、全参加者でのディスカッションを経て終了しました。

(山本 堅一)

E 情報学

情報学では、1年生を対象に、前期に情報学Ⅰ、後期に情報学Ⅱの2科目を開講しています。前期の

情報学Ⅰは、必修の授業であり、約2600人の入学生を20人程度の小グループに分け統一カリキュラムで実施しています。1コマに6-9教室並列して授業を行うため、複数のTA及び非常勤講師が、学生に直接、相対して指導・助言等を行います。

本分科会では、初めて情報学を担当するTAを含め、経験豊かなTF、及び並列授業全体の管理をするSタイプのTA(STA)など、本科目を担当するTAと非常勤講師が一堂に会して、本年度の情報学Ⅰの目標、内容、実施指導体制、教材、成績評価の概略の説明と具体的な評価項目の説明を行いました。

本分科会にて、ELMSの課題設定までを行う予定で準備を行っておりましたが、ELMSシステムの不調が続く、業者立ち会いの下でも、目標は達成できませんでした。昨年もシステムトラブルのため、課題設定を行うことができなかったこともあり、説明会で本来行うべき主要項目の説明ができないことが続いています。抜本的な改善と、対応を行っていたきたいと改めて強く感じた分科会でした。

時間が限られておりますため、システム関係は除外し、その他の各内容は端的な説明とし、初回のガイダンス時の流れ、各回の注意事項などについて、集中的に確認を行いました。

分科会終了後には、更に授業の全体管理を行うTFならびにSTAが集まり、並列授業全体の進捗確認手法などの情報共有と支援について、意見交換しました。TAの教育指導力育成にもつながる科目であり、TAには主体的に授業に関わっていただく予定です。

(布施 泉)

F 英語Ⅱオンライン授業

TA研修分科会F、英語Ⅱオンライン授業の研修は情報教育館3階CALL教室からスタートし、関連教室・事務室等を回って90分ほどをかけて説明・質疑応答を行いました。まず、情報教育館では英語Ⅱ実施のためのTA用マニュアル等を配布し、さらにスライド上映により業務の概要や注意事項を説明しました。この授業ではオンライン教材を使用するため、その場でPCへのログイン、オンライン教材の操作練習もTAにしてもらいました。次に学務部教育推進課・全学教育担当へ移動し、出勤簿や教室の鍵の場所を確認しました。さらにE309CALL教室、

CALL授業準備室、メディア棟のCALL教室2つの場所や使い方を確認しました。メディア棟の警備員室が担当者不在のためPCシステム起動のための鍵を借り出せず、実際に機材を使ってみるところができなかったというハプニングはありましたが、他はおおむね順調に進みました。例年、経験者・未経験者を問わず全員の参加を義務付けていますが、体調不良などで経験者2名の欠席がありました。

(土田 映子)

G 英語Ⅱ以外の英語の授業

英語Ⅱ以外の英語の授業を担当するTAのための分科会は、業務内容が授業担当教員の方針により千差万別であるため、全体に関係すると思われる大まかな説明・案内を中心としました。英語TAを行うにあたって留意すべき点について口頭で注意喚起を行なうとともに、全学教育事務でレポートボックス、視聴覚機器、鍵、機材の扱いに加え、全学教育スタッフ室の利用の説明を行い分科会は無事終了しました。他方、研修会が全体、分科会ともに日本語で行なわれるなか、日本語能力が不十分な留学生TAが増えている問題は今後の課題と感じました。英語だけで研究が遂行できる分野の留学生は、全学教育のTAも英語だけで勤務可能との認識を持つ傾向が皆無ではありません。事務手続きや研修をバイリンガル化できないのであればTA採用条件における日本語能力を厳密に問うべきなのか。TA業務に支障がないTAの日本語能力をどのレベルで定義するのかに関して、留学生TAにとっての今後の問題として引き継ぎたいと思います。

(渡辺 将人)

H 初習外国語(中国語以外)

本講習会においては、本講習会の全体における(1)位置付けの解説、(2)外国語TAを行うための目的、意義、注意事項等の2点に関して行ないました。

(1)に関しては、本全体講習会が外国語TA(英語、中国語を除く)を行ううえでの一般的な共通事項を理解することを目的とし、各国語の業務内容の確認に関しては、後期開始前の各国語TA説明会への参加により行うことが説明されました。

(2)の外国語TAを行うための目的、意義、注意事項に関しては、目的・意義等の一般的な話から、過

去の事例等を参照した具体的事例紹介及び注意事項にわたる紹介が行われました。なお、業務の運営方法、内容は、各国語により全く異なるので、各国語のTA講習会参加は必須であることが確認されました。

(伊藤 直哉)

I 中国語

今年度の中国語TAは33名(うち6名が経験者)を採用しました。例年のように全員が中国語母語話者で、大学院の留学生です。中国語のTAはネイティブという特性を活かして、単に教員の補助という役割を超えて、教員の一人として重要な役割を担います。

分科会では全体会を振り返り、TAの役割を確認し、授業の内容について説明を受け、具体的な業務の内容を理解するようにしました。特にTAは教員という立場であり、社会的責任が大きく、学生の中国人理解の代表となることを肝に銘じてほしいと伝えました。

例年会場に使用している教室が今年度、アクティブラーニング用に改築されました。よい機会ですので、受講者との双方向の意思疎通を大切にする形式で説明を進めたことを付け加えておきます。

(藤野 陽平)

J 心理学実験

今回のTA研修には4名の学生が参加しました。まずTAはどのような点に気を配る必要があるかについて、研修生の考えを訊きました。本授業の履修者は1年生で、心理学を専攻する学生とは限らないことから、丁寧に分かりやすく説明することの大切さを学びました。続いて教員がTAの役割について説明し、実験の準備、授業中の学生指導と教員のサポート、レポート回収と採点について学びました。最後に、「個人情報はどう扱うか」、「自分勝手に実験を進める学生にどう接するか」など、授業中に起こりうるケースについてディスカッションを行いました。研修生は、1年生の立場に立った丁寧な説明が大切であることを再認識しました。

(和田 博美)

K 自然科学実験

自然科学実験の分科会では、まず15:00より講義室にて4カテゴリー（物理学、化学、生物学、地球惑星科学）共通のプログラムを行い、自然科学実験の概要、TAとしての仕事内容と一般的な心構え、各実験共通の安全上の注意点などについて、スライドを用いた説明を行いました。その後、15:30からは各カテゴリーに分かれて、それぞれの実験室にて、カテゴリー毎の実験の詳細やシステムに関する説明、TAとしての注意点、安全教育等を行いました。

(吉澤 和範)

L 体育学

体育学TA分科会では、教育学研究院修士課程大学院生9名（1年生7名、2年生2名）が参加、第2体育館内で実技形式の体育学Aと講義形式の体育

学Bの特徴、注意点について説明しました。特に、実技における学生との関わりに重点を置き、TAとしてのふるまいや心得について説明しました。また、実技科目では授業中の安全管理が重要となるため、外傷に対する応急処置の手順および事故が発生した際の対応、体外式除細動器（AED）の使用方法を説明しました。最後に体育館、控室となる体育館事務室、更衣室などを実際に回りながら、利用方法や用具がどこにあるのかを確認しました。TAは講義のアシスタントの位置づけですが、とりわけ実技科目では授業に実質的に関わることが多く、教員、受講生とともに授業を作る一員です。単にサポートするのではなく、教育に携わるという意識を醸成する必要があります。分科会がそのきっかけとなれば幸いです。

(山崎 貴史)



写真1 全体会の様子

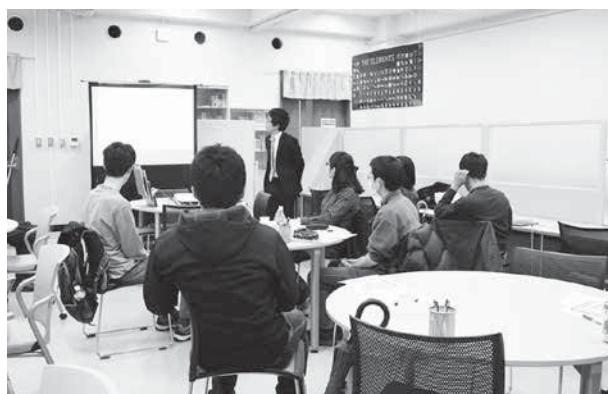


写真2 分科会の様子

教育評価 EDUCATIONAL EVALUATION

1年生、3年生の自習時間

— 「平成29年度授業アンケート」と「2017年度学生調査」の結果より —

本学では、学生を対象とした2つのアンケートにおいて、自習時間を調査項目としています。全学教育における「授業アンケート」で、授業1回当たりの自習時間をたずね、1年生と3年生を対象とした「学生調査」において、1週間当たりの自習時間をたずねています。単位の実質化の観点からこの自習時間の調査結果に注目しており、毎年本ニュースレ

ターで報告しています。

授業アンケートは、毎学期の終わりに全学教育を担当する本学教員と非常勤講師に依頼し、平成29年度は、延べ約3万名の学生より回答を得ました。アンケート実施率は、本学教員、非常勤講師ともに8割を超えています。授業1回（90分）当たりの自習時間は、5択（「4時間以上（4）」、「3時間（3）」、

「2時間 (2)」、「1時間 (1)」、「30分以下 (0.25)」で回答を求め、それぞれ括弧内の数値 (単位: 時間) に変換して平均自習時間を求めました。その結果、1学期は1.29時間、2学期は1.28時間となりました。前年度比約11分増となり、平成18年度以降で最高の値を示しています (図1)。平成28年度の自習時間の大幅な減少の原因は、授業アンケート回答用紙が変更され、説明文中の選択肢の肯定的回答から否定的回答への並び順と回答欄の並び順が逆になってい

ることにより、回答者が選択肢を誤認したことにあると本ニュースレター第109号で述べました。このことが原因で平成28年度と29年度の差が強調されて見えますが、平成29年度は選択肢順が統一され、回答は正常化したと言えます。しかし、近年の経年変化を議論することは難しく、自習時間が増加傾向にあるのかどうかの議論については、今後に譲りたいと思います。

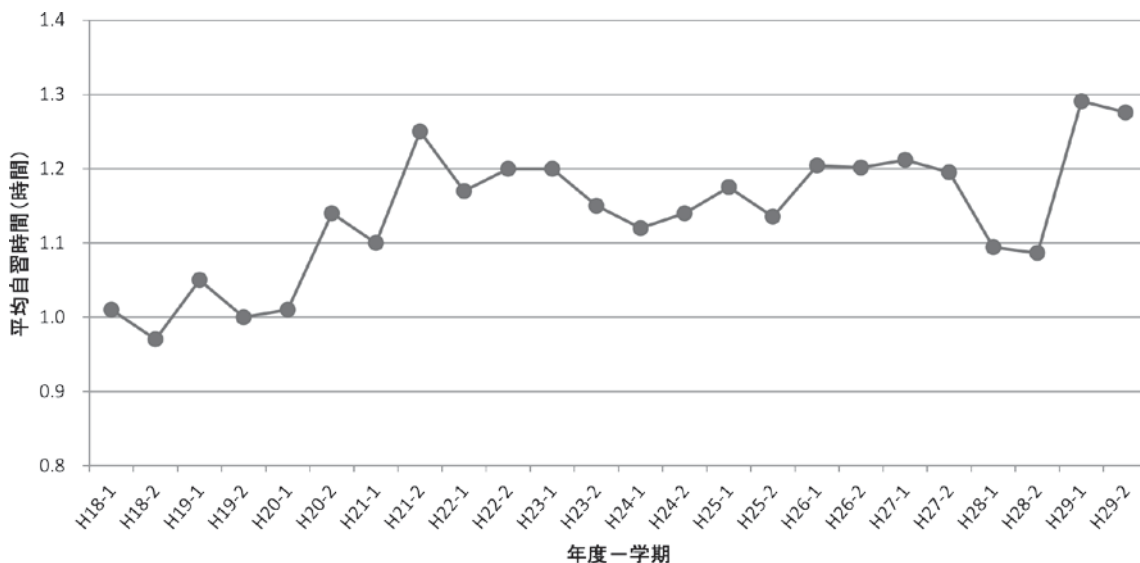


図1 授業1回あたりの自習時間の経年変化 (授業アンケートより)

学生調査は、毎年2学期開始後に1年生と3年生を対象に実施しています。この調査では、1週間当たりの自習時間を「授業時間外に、授業課題や準備学習、復習をする」活動時間と定義して聞いています。8択の選択肢 (「全然ない (0)」、「1時間未満 (0.5)」、「1~2時間 (1.5)」、「3~5時間 (4)」、「6~10時間 (8)」、「11~15時間 (13)」、「16~20時間 (18)」、「20時間以上 (20)」) で回答を求め、それぞれの選択肢を括弧内の数字 (単位: 時間) に置き換えて平均自習時間を計算しています。2017年度の調査結果は、1年生が8.7時間、3年生が7.1時間となりました (図2)。1年生については、2012年度以降で最高の値を示しており、既述した全学教育の自習時間の結果とも整合しています。全学教育における大きな改革がない中で自習時間の増加であり、1年生は6年間で約1時間増加しています。学生の質が徐々に変化してきていることや2011年度に導入した総合入試制度が定着してきたことも原因

の可能性として考えられます。3年生については、多少の増減はありますが、6年間の経年変化に増加傾向は見られません。

さらに、全学教育課程で学ぶ学生から文系と理系で課題量が大きく異なるとの声がありますので、1年生の学生調査の結果を文系、理系別に見てみます。1週間当たりの自習時間は、文系の平均が7.2時間、理系が9.2時間となり、2時間の差がありました。2012年以降の文系と理系の差は、1時間から2.4時間で、理系の自習時間が長い傾向が続いています (図3)。

これが課題量の差のみに起因するものなのかどうかの精査は必要ですが、広い分野を横断的に学ぶ全学教育におけるこの差は大きいと考えられます。自習時間から話が逸れますが、その他の1週間当たりの活動時間で、文系、理系の差が1時間以上の項目を見てみます。2017年度の結果は、以下の通りです。
・「授業や実験に出る」: 文系17.1時間、理系18.2時

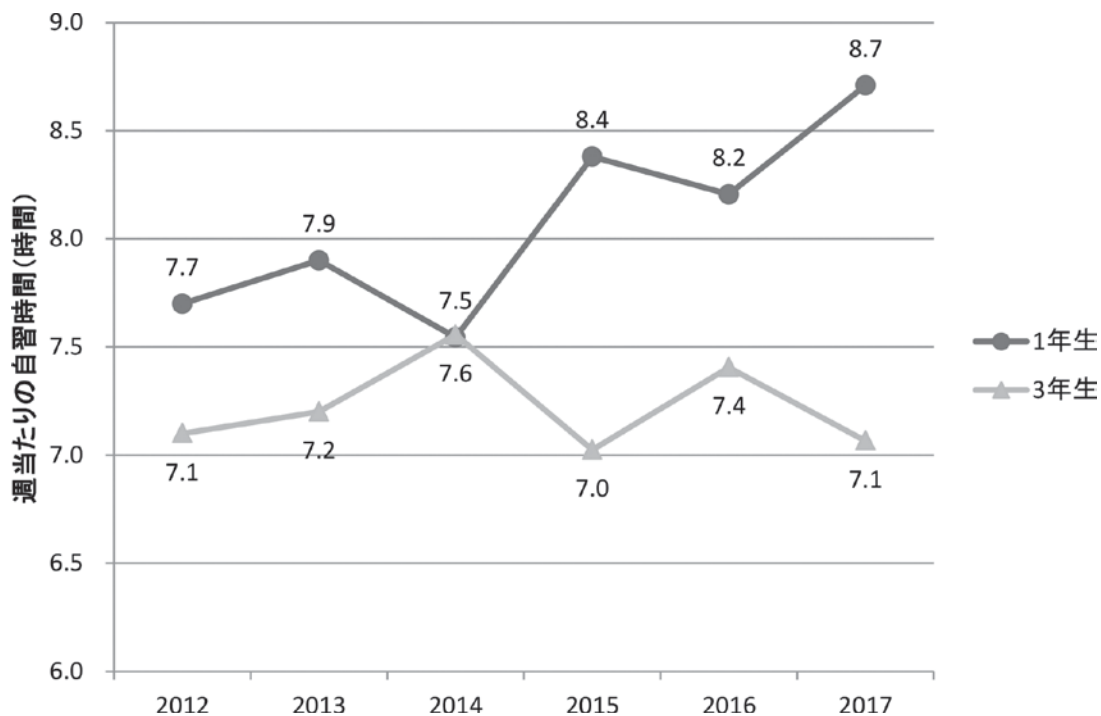


図2 1週間当たりの自習時間の経年変化 (学生調査より)

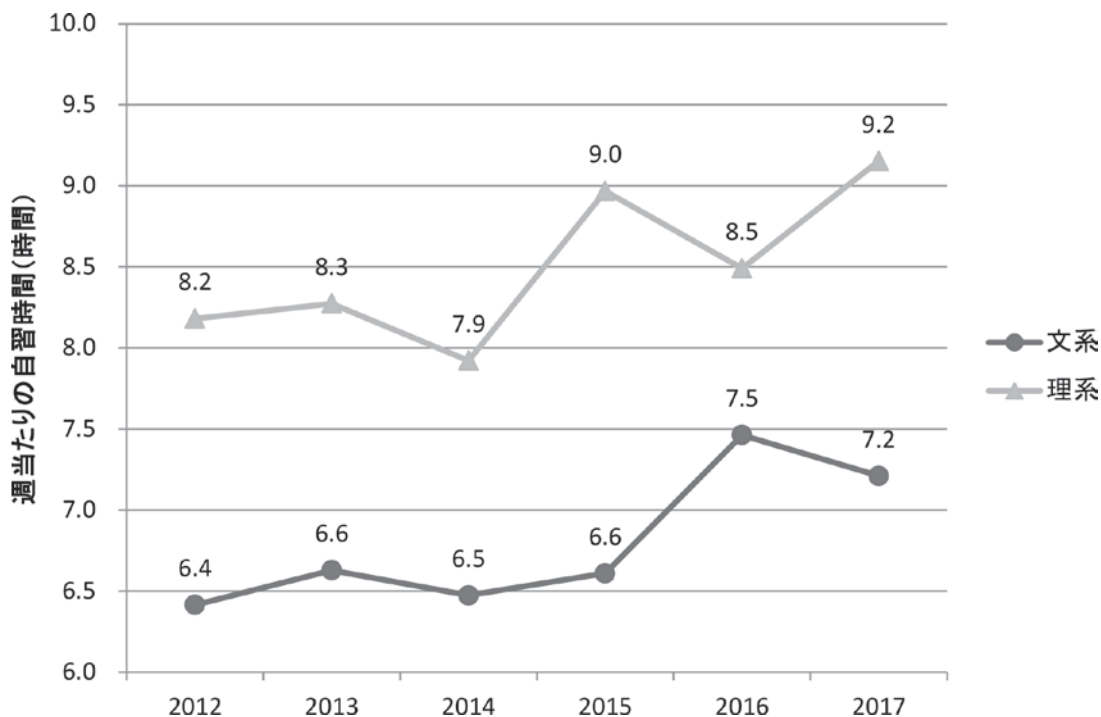


図3 文系/理系別1年生の1週間当たりの自習時間の経年変化 (学生調査より)

間 (文系-理系: -1.1時間)

- ・「アルバイトや仕事をする」: 文系5.7時間, 理系4.6時間 (同1.2時間)
- ・「読書をする」: 文系3.2時間, 理系1.9時間 (同1.3時間)

文系と理系の差を足すと, 1.4時間になり, 調査している活動時間の中で最も差が大きかった自習時間

差の大部分を埋める結果となっています。つまり単純には, 文系は自習時間, 授業に出る時間が理系に比較し短い, その分アルバイトや読書に時間を割いていると解釈することができます。近年, 大学生の読書時間の減少が問題になっている中で, 文系の学生が読書にそれなりの時間を割いている結果は歓迎すべきことですが, それぞれの活動時間差を縮め

る取り組みが必要なのかは、大学や学部の教育方針に沿って慎重に議論していく必要があると感じてい

ます。

(宮本 淳)

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

北海道大学入試改革フォーラム2018を開催

2018年5月21日(月)に学術交流会館において、北海道大学入試改革フォーラム2018を開催しました。本フォーラムの開催は昨年度に続く2回目で、高等学校、大学、教育・受験産業関係者等209名が参加しました。

今年度のフォーラムは「多面的・総合的評価に基づく選抜に向けて」をテーマとし、大学と社会に焦点を当て、大学における選抜、企業における選考の二つの評価場面から多面的・総合的な評価のあり方や評価すべき資質・能力について講演をしていただき、それを踏まえて総括討論を行いました(表1)。講演者として、川嶋太津夫氏(大阪大学高等教育・入試研究開発センター)、山本以和子氏(京都工芸繊維大学)、松村直樹氏(株式会社リアセック)、福原正大氏(Institution for a Global Society)を招き、川嶋氏、山本氏には大学の視点から、松村氏、福原氏には企業の視点からそれぞれ講演していただきました。

第一部は川嶋氏、松村氏による基調講演でした。川嶋氏には、大学入試改革にともなって取り上げられることが多くなったアドミッション・オフィサー(入学者選抜の専門的人材)について講演していただきました。まず、日本とアメリカの大学入試制度の違いに基づいて、日本におけるアドミッション・オフィサーに求められる事柄や育成の現状について整理し、その後、大阪大学で展開されているHAO(Handai Admission Officer)育成プログラムについて紹介していただきました。最後に、まとめとして、アドミッション・オフィサーの育成・活用を含めた日本の大学入試改革に対する展望について述べていただきました。

松村氏には、高校での学習活動にも影響を与えつつある汎用的能力とその評価について講演していた

いただきました。前段として、アメリカや日本における、汎用的能力の代表的な定義・枠組みの議論の流れ、さらには、技術革新が目覚ましい産業界でこれから求められる能力について示していただきました。そして、汎用的能力を認知的/非認知的、評価方法を直接的/間接的に分けて、汎用的能力の評価法について整理し、自社で開発した試験であるPROGの概要と大学生・社会人を対象とした結果を説明していただきました。最後に、教科学力と汎用的能力を総合的に評価して大学入試に利用する場合にどのようなことが予想されるかという見地から話をまとめていただきました。

第二部は山本氏、福原氏による現状報告でした。山本氏には、大学における学びのレディネス育成までを目指して設計された、京都工芸繊維大学のダビンチ入試の現状を報告していただきました。まず、高校と大学のつながりから見たダビンチ入試の狙い・意義に関する導入の話に続けて、具体的な入試の枠組みや選抜の流れ、合格者の特徴について説明していただきました。さらに、より具体的な話として、書類選考や体験入学型の試験における評価に対する基本的な考え方や評価観点についても示していただきました。

福原氏には、企業の選考場面におけるコンピテンス(資質・能力)の評価の現状として、AIを利用した評価ツールであるGrow360について報告していただきました。最初に、Grow360の開発の目的や評価の枠組みを紹介し、これまでに得られたデータから分かった従来型のエントリーシート等による評価の問題点やそれらと比較したGrow360による評価の特長について解説していただきました。また、大学をはじめとした教育現場での利用や、企業における特徴的な利用の具体例を交えて、今後の展開の可能

性についても示していただきました。

第三部の総括討論は、藤田修氏（アドミッションセンター副センター長）、鈴木誠氏（高等教育推進機構）を司会として、基調講演と現状報告に関する参加者からの質問に登壇者が答える形式で進められました。大学入試における多面的・総合的評価が高校教育に与える影響や高等学校への導入が進められつつあるeポートフォリオに対する見解等について、登壇者と司会者の間で意見が交換されました。

アンケートからは、「大学入試制度の変更に限定せず、社会とのつながりまでを具体的にイメージできたのがとてもよかった。」「大学の入学者選抜の現状や入社試験の現状など普段は聞けない内容であった。」など好意的な意見が多く得られました。フォーラムは来年度も開催する予定です。今年度のフォーラムで見つかった問題点を改善し、関係者にとって有益な企画を考えたいと思います。

(岩間 徳兼)

表1 北海道大学入試改革フォーラム2018プログラム

13:00	開会の辞 北海道大学総長 名和 豊春
13:10	基調講演1 「入学者選抜におけるアドミッション・オフィサーへの期待と課題」 大阪大学高等教育・入試研究開発センター長 教授 川嶋 太津夫 氏
13:55	基調講演2 「大学生・社会人に求められる汎用的能力とその評価」 株式会社リアセック 代表取締役CEO 松村 直樹 氏
14:45	現状報告1 「センター試験、教科別学力試験を課さないダビンチ入試における資質・能力の評価」 京都工芸繊維大学基盤科学系／アドミッションセンター 准教授 山本 以和子 氏
15:15	現状報告2 「企業が大学生に求める気質・能力とは？～入社試験における評価と大学における教育事例～」 Institution for a Global Society 代表取締役社長 ／一橋大学大学院・慶応義塾大学 特任教授 福原 正大 氏
15:45	～ 休 憩 ～
16:00	総括討論 ○コーディネーター 北海道大学アドミッションセンター 副センター長 藤田 修 北海道大学高等教育推進機構 教授 鈴木 誠 ○パネリスト 大阪大学高等教育・入試研究開発センター長 教授 川嶋 太津夫 氏 株式会社リアセック 代表取締役CEO 松村 直樹 氏 京都工芸繊維大学基盤科学系／アドミッションセンター 准教授 山本 以和子 氏 Institution for a Global Society 代表取締役社長 ／一橋大学大学院・慶応義塾大学 特任教授 福原 正大 氏
16:50	閉会の辞 北海道大学理事・副学長・アドミッションセンター長 長谷川 晃

地域社会連携 Community Relations

全学公開講座「去る時代，来たる時代を考える」を開催しました

7月2日から23日にかけて，平成30年度北海道大学公開講座（全学企画）を高等教育推進機構N1教室（16日は学术交流会館小講堂）で開催しました（写真1）。平成も残りわずかとなった今年は，さまざまな専門分野の観点から，平成の30年間を回顧しつつ，新たな時代を展望するという趣旨で，「去る時代，来たる時代を考える」を8回共通のテーマに設定しました。例年どおり，全学の教員で構成する北海道大学公開講座実施部会において選ばれた，8人の講師が交代で講義しました。

担当講師と講義題目は表1の通りです。期間中の月曜日と木曜日に実施し，今年も，平日に仕事などがある方にも受講しやすいよう，8回中2回分を祝日（7月16日（月・海の日））の昼間に行いました。

第4回には，名和豊春総長が「世界的課題解決に貢献する国立大学の使命—北海道大学の挑戦—」と題して講義。日本の大学をとりまく世界的情勢や，北海道大学の歴史にも触れつつ，農学や食，健康の分野での取り組みなどを事例として，現実の課題解決を指向した本学の研究・教育活動について話しました。

また今年も，総合教育部の1年生23人が，全学教育科目の一般教育演習（フレッシュマンセミナー）における実習の一環として，講義前半の司会を担当する形で，公開講座の運営に参加しました。

今回，全8回を通して申し込んだ受講者は121人で，特定回のみ受講者50人を合わせると，受講者総数は171人でした。6回以上の講義に出席した100人には，最終回の閉講式で，武田定・公開講座実施部会長（理学研究院教授）から修了証書を授与しました。

（三上 直之）



写真1 講義の様子

表1 平成30年度北海道大学公開講座（全学企画）
テーマ：去る時代，来たる時代を考える

	日程	講義題目	担当講師
第1回	7月2日(月) 18:30~20:30	新概念コンピューティングとは？	電子科学研究所 小松崎 民樹 教授
第2回	7月5日(木) 18:30~20:30	日本流通史にとつての「平成」 -商店街に注目して-	経済学研究院 満菌 勇 准教授
第3回	7月9日(月) 18:30~20:30	昭和史と平成史 -後世の史家は何を思うのか-	文学研究科 白木沢 旭児 教授
第4回	7月12日(木) 18:30~20:30	世界的課題解決に貢献する国立大学の使命 -北海道大学の挑戦-	名和 豊春 総長
第5回	13:00~14:45	中国の改革・開放40年と習近平体制の行方	メディア・コミュニケーション研究院 藤野 彰 教授
第6回	7月16日(月・祝) 15:15~17:00	移民，民族，アイデンティティ：多文化共生は可能なのか？	公共政策学連携研究部 池 炫周 直美 講師
第7回	7月19日(木) 18:30~20:30	人生90年時代に自分らしく生きることを目指す	保健科学研究院 村田 和香 教授
第8回	7月23日(月) 18:30~20:30	人工知能がもたらす未来	情報科学研究科 川村 秀憲 教授

学生支援 STUDENT SUPPORT

平成30年度夏季休暇中における「全学インターンシップ」を実施中

キャリアセンターと共同で、全学教育科目として「インターンシップA・B」を開講していますが、今年度についても夏季休暇を中心とした実施に向け、学生と企業の希望のマッチング、事前研修などを行いました。

今年度の学部、研究科・学院別、学年別の参加者数は表1のとおりです。

表1 全学インターンシップ参加者数(学部)

学部	1年	2年	3年	4年以上	計
文学部		3	5	1	9
教育学部		1	5		6
法学部		4	14		18
経済学部		6	9		15
理学部			2		2
薬学部	1		1		2
工学部		9	7	1	17
農学部		1	4		5
水産学部		1	5		6
総合理系	2				2
計	3	25	52	2	82

表2 全学インターンシップ参加者数(大学院)

研究科・学院	修士1年	修士2年	博士	計
教育学院	1			1
農学院	6			6
水産科学院	1			1
環境科学院	3			3
理学院	2			2
計	13	0	0	13

今年度は、可能な範囲内でより充実したインターンシップを提供するため、企業での実習期間を昨年度までの5日以上から8日以上とし、企業には負担増という結果になりましたが、多くの企業からの協力を得ることができました。

参加が決まった学生に対しては7月3日、4日、10日、11日に講義形式の事前研修を実施し(写真1)、その後、1名15分あたりの個人面談も実施しました。この事前研修や個人面談では、インターン

シップ先の企業・団体や業界等の研究を行うとともに、インターンシップを通じて検証したい仮説を設定します。そして、インターンシップを通じてその検証を行う予定です。同時に、学生はインターンシップ先の企業等に対して連絡を取り、札幌近辺の場合は事前に訪問し、打ち合わせを行っています。仮説の検証や学生自らの連絡・打ち合わせの実施は、2週間程度という短期間のインターンシップの効果をより高めるため、北大独自の方式となっています。また、最近企業からの要望が多い守秘義務の徹底についても時間を割いて説明を行いました。

さらには、昨年度から新たな試みとして実施した「インターンシッププレ研修」も参加学生には好評だったので、今年度も、5月22日、26日、7月18日の計3回実施しました。

5月22日のプレ研修①では、インターンシップ企業やプログラムの選び方、インターンシップ選考のためのエントリーシートや面接の準備の仕方などについて説明を行いました。5月26日のプレ研修②では、インターンシップや仕事で必須の要素を学べるグループワーク形式の研修を行い、参加企業からのフィードバックをいただきました。7月18日のプレ研修③では、インターンシップで求められる社会人としての行動やマナーについて、株式会社マイナビの大塚祐宜氏を講師としてお招きし、お話をいただくとともに、マナーに関する実践練習を行いました。

これらを経て、参加学生はそれぞれの企業・団体で夏季休暇中にインターンシップ実習を行っています。

インターンシップ終了後には、1ヶ月以内に研修成果レポートを各自提出するとともに、10月26日には、参加学生の「インターンシップ成果発表共有会」を開催し、受入企業にも参加していただき、インターンシップの成果を共有する予定です。

(亀野 淳)



写真1 「全学インターンシップ事前研修」の様子



写真3 「インターンシッププレ研修②」の様子1

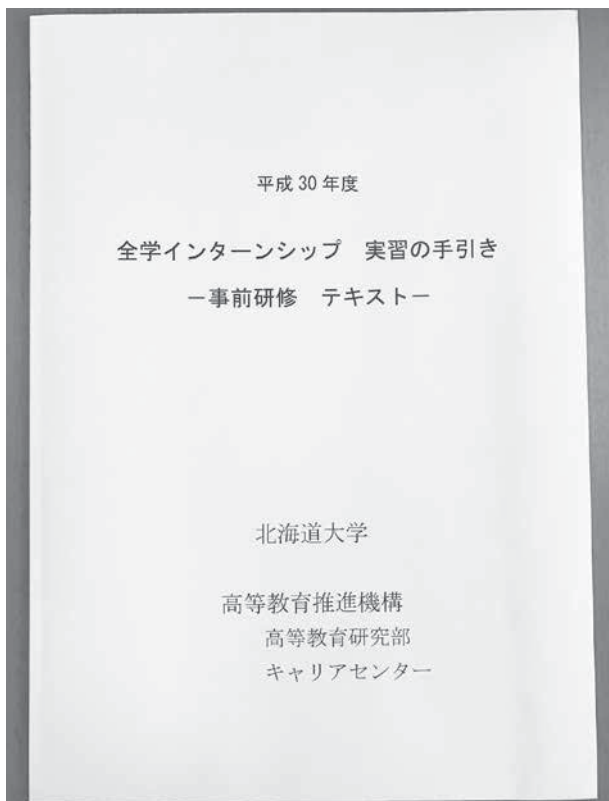


写真2 「全学インターンシップ事前研修」テキスト



写真4 「インターンシッププレ研修②」の様子2



写真5 「インターンシッププレ研修③」の様子

科学技術コミュニケーション オープンエデュケーションセンター CoSTEP部門

CoSTEP, アドビと初の連携授業「デザインスキル演習」を実施

2018年5月27日, アドビ システムズ 株式会社 (以下, アドビ) とCoSTEPが協働した初の連携授業「デザインスキル演習」(本科生向け) が北海道大学高等教育推進機構 (N281教室) で開催され, 14名の本科受講生が参加しました。アドビからは, 名久井舞子さん (アドビ マーケティング本部 Creative Cloud

ビジネスマーケット部インストラクター, 写真1) を講師としてお招きし, CoSTEPでは朴炫貞, 池田貴子, 村井貴, 早岡英介が担当しました。科学技術コミュニケーションにおいてより効果的にメッセージを伝えるためには, デザインスキルがとても重要です。CoSTEP本科生は北大の理系学生が中心で,

本格的なデザインスキルを学ぶ機会はめったにありません。1年の学びを始めるこの時期に、ソフトウェアの基礎をしっかりと学べるような場を設けました。今回の演習は、PhotoshopとIllustratorの操作方法に関するレクチャー（2時間程度）と、そこで学んだことを活用する二つのワーク（3時間半程度）で構成されています。昼休みをはさんで6時間以上に及ぶ演習となりましたが、受講生たちは早くも創造性を発揮し、楽しみながら参加していました。



写真2 レクチャーを聞いている学生



写真3 実践を交えてイラストレーターを説明している様子

写真1 レクチャーをしているアドビの名久井さん

写真を構成するスキルを学ぶ

まずは写真や画像を編集するPhotoshopに関するレクチャーからです。基本的な操作からレクチャーしていただきましたが、中でも参加者全員が度肝を抜かれたのは、画像の中心となる被写体をアドビの人工知能「Adobe Sensei」選択範囲として自動で指定して消すことができる最新機能のデモンストレーションです。本来被写体の下には無いはずの背景は、Adobe Senseiが予測して合成するそうです。

より自由な表現のため、イラストレーターを学ぶ

続いて、イラスト作成や自由度の高いレイアウトが可能なIllustratorのレクチャーです。Photoshopはビットマップ画像による処理なので、拡大していくとピクセルの集まりが見えてきて輪郭が不鮮明になっていきます。しかし、Illustratorはベクトルデータによる画像なので、どれだけ拡大しても鮮明のままです。レクチャーではこうした両ソフトで扱うデータの質が異なることや、レイヤーの概念、PowerPointと違ってどんなことができるかといった可能性についても説明がありました。

科学技術コミュニケーター像を表現してみる

休憩を挟み、午後の演習ではワークを二つ行いました。まず一つ目は、自分の写真を撮影してアドビのストックフォトサービス「Adobe Stock」の写真を合成し、レイアウトする「自分の映画ポスターの作成」です。そのワークを踏まえ、自分が目指している科学技術コミュニケーターのイメージを可視化する「〇〇な科学技術コミュニケーター」ワークにも挑みました。自己PRができた上に、抽象的な学びの目標を、何かに例えてビジュアルで表現することで、学びの態度やゴールがより明確になる効果に繋がったと思います。



写真4 受講生が演習で作成した「〇〇な科学技術コミュニケーター」のイメージ

ツールを学ぶことで、コンテンツをより深く考える

初心者から仕事で使っている人までそれぞれスキ

ルの差はありましたが、ソフトウェアの基礎概念を改めて整理して学び直すきっかけになりました。また、伝えたいメッセージがはっきりしていないと形だけの作品になってしまうこと、様々な先行事例を意識して見ることの重要性についても気付かされました。ソフトウェアも、技術の発展と共に変化し続けています。科学技術コミュニケーターとして必要なデザインスキルを身につけられるように、CoSTEPは今後もアドビと連携して授業を開発していきたいと考えています。

(朴 炫貞)



写真5 アドビのAをイメージした集合写真

新任紹介 INTRODUCTION OF NEW STAFF

着任のご挨拶

高等教育推進機構 新渡戸カレッジ
特任助教 シュルーター智子

2018年4月1日付で新渡戸カレッジ担当の特任助教に着任しましたシュルーター智子と申します。専門は宗教学で、北大文学部および大学院文学研究科のほか、ドイツ・バイロイト大学大学院文化学科(修士)、立教大学大学院キリスト教学研究科(博士)にて、主に近現代ドイツの宗教思想や宗教教育に関する研究を行ってきました。また、苫小牧工業高等専門学校などで哲学・倫理学、ドイツ語等の授業を担当し、前職では、北海道教育大学でアドミッションオフィサーとして特別入試の企画に携わって参りました。

新渡戸カレッジについては、北大独自の意欲的なプログラムとして、発足当初から注目していました。現在は、この魅力あるプログラムに携わる機会を得たことに感謝しつつ、期待に応えるべく日々の仕事に取り組んでいます。私が担当する「グローバル基礎科目」や「フェローゼミ」は、新渡戸カレッジ1年目の学生を対象とするため、学生たちの意欲を刺

激し、以後の学修に向けた良いスタートとなるような授業を工夫していきたいと考えています。皆様から、ぜひ助言やアイデアなどいただければ幸いです。

個人的には、母校で職を得て、同郷である新渡戸稲造の名を冠したプログラムを担当することに感慨めいたものをおぼえてもいます。親元を離れ、北大という新たな世界に足を踏み入れたばかりのあの頃、「自由」と「学問」への扉を前に感じていた漠とした不安と期待は、今も心に刻まれています。あれから四半世紀の時を経て、変化し失われたものがあるとしても、学生たちが抱く不安と期待は、当時の私や友人たちとそう変わらないのかもしれませんが。

そうした思いも含め、本職においては、私のこれまでの教育と研究の経験を活かし、新渡戸カレッジと北大の教育研究活動に貢献できるよう、全力を尽くす所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

日誌 EVENTS, April-July

4月

- 4月1日 (行事) 新渡戸カレッジ仮入校プレイスメントテスト
- 3日 (研修) 全学教育科目に係るTA研修会
- 3日 (研修) 全学教育TA研修会
- 5日 (行事) 新入生オリエンテーション, 総合教育部ガイダンス
- 9日 (研修) 新入生向け教育情報システム(ELMS)利用に関するガイダンス
- 10日 (行事) 全学教育部 第1学期授業開始日
- 10日 (行事) 新渡戸カレッジ仮入校合格発表
- 12日 (会議) 第1回オープンエデュケーションセンター連絡会議
- 14~15日 (講義) 放送大学北海道学習センター「科学技術コミュニケーションとは」
- 16日~7月23日 (行事) 教員志望者ガイダンス (第5~11講目)
- 17日 (会議) 第1回総合教育教務・学生専門委員会 (持回り)
- 18日 (会議) 第1回ELMS定例会議
- 21日~22日 (行事) 新渡戸カレッジ第1回対話プログラム
- 25日 (会議) 第1回学生委員会
- 25日 (行事) インターンシップではじめる!就活準備ガイダンス
- 26日 (行事) 日本で就職するための留学生ガイダンス
- 26日 (行事) オナーズプログラムガイダンス
- 26日 (研修) ELMS講習会~授業でELMSを活用する~【入門編4/26】
- 27日~5月8日 (会議) 第1回高等教育推進機構運営委員会 (持回り)
- 27日 (会議) 第1回新渡戸カレッジ定例会

5月

- 5月1日 (会議) 第1回キャリア支援専門委員会
- 1日 (行事) オナーズプログラムガイダンス
- 7日 (会議) 第1回NITOBEd教育システム運営会議 新渡戸カレッジ教務専門委員会
- 8日~11日 (会議) 第2回学生委員会 (持ち回り)
- 9日 (研修) 講演会「キャンパスにおけるハラスメントをとらえる視点と予防の重要性」~学生に対するハラスメント編
- 10日 (会議) 第2回オープンエデュケーションセンター連絡会議
- 11日 (会議) 北海道地区FD・SD推進協議会幹事会
- 11日 (会議) 第1回新渡戸カレッジフェロー交流・研究会
- 11日 (会議) 第1回NITOBEd教育システム運営会議
- 12日 (講演) CoSTEP開講特別プログラム「メタクリエイターの発想法」
- 12日 (行事) 新渡戸カレッジ入校式
- 12日 (行事) 新渡戸Day (第1回グループ・ミーティング含む)
- 14日~21日 (行事) 国家公務員総合職第2次試験直前対策会
- 16日 (会議) 入学者選抜委員会
- 16日 (見学) 拓殖大学北海道短期大学 S棟スタジオ見学に来訪
- 18日 (研修) ELMS講習会~授業でELMSを活用する~【入門編5/18】
- 21日 (行事) 北海道大学入試改革フォーラム2018
- 22日 (会議) 第2回高等教育推進機構運営委員会
- 22日 (行事) インターンシッププレ研修第1回
- 23日 (会議) 第1回全学教育専門委員会
- 23日 (会議) 第2回ELMS定例会議
- 25日 (研修) 第35回北海道大学教育ワークショップ「アクティブラーニング型授業の

- 実践」
- 25日 (会議) 第2回新渡戸カレッジ定例会
- 25日 (行事) 留学生のための就職活動オールガイド講座1
- 26日 (行事) インターンシッププレ研修第2回
- 29日 平成31年度AO入試・国際総合入試・帰国子女入試学生募集要項公表
- 29日 (行事) 三省堂サイエンスカフェ in札幌
「毒を解く～動物が化学物質を代謝するしくみ～」
- 30日 (研修) 講演会「アクティブラーニングの正しい理解」

■ 6月

- 6月3日 (行事)
第100回サイエンス・カフェ札幌
「THE イグ・ノーベル SHOW ～「研究」で笑い「研究」で考える～」
- 5日 (会議) 第3回学生委員会
- 5日 (研修) 講演会「学習評価の基本」
- 7日 (会議) 第3回オープンエデュケーションセンター連絡会議
- 7日～8日 (会議)
平成30年度国立大学教養教育実施組織会議 (群馬)
- 9日～10日 (行事)
セルフキャリア発展ゼミ 日高合宿
- 11日 (研修) 第1回勉強会 (OEC)
- 13日 (研修) 講演会「現代の学生理解～学生相談室から見る学生の悩みと成長～」
- 13日 (会議) 第3回ELMS定例会議
- 15日 (研修) ルーブリック評価作成ワークショップ (入門編)
- 20日 (研修) ルーブリック評価活用ワークショップ (発展編)
- 22日 (研修) 講演会「メンタルヘルスケアから健全な職場を作る」
- 23日 (行事) 学部1・2年生のための「ちょっと立ち止まって将来をデザインするガイダンス」
- 25日 (会議) 全学教育科目責任者会議 (外国語科目)

- 26日 (会議) 第3回高等教育推進機構運営委員会
- 27日 (会議) 第2回全学教育専門委員会
- 27日 (会議) 第1回成績評価結果検討専門部会
- 29日 (会議) 第3回新渡戸カレッジ定例会
- 29日 (行事) 新渡戸カレッジ第2回グループ・ミーティング (1グループ)

■ 7月

- 7月2日 (行事)
第1回北海道大学公開講座 (全学企画)
- 2日 (行事) 新渡戸カレッジ特別講演会
- 2日～6日 (会議)
第2回NITOBEd教育システム運営会議 新渡戸カレッジ教務専門委員会 (持ち回り)
- 3日～8月3日 (行事)
「差の湯の会」(協力: Hokkaidoサマー・インスティテュート)
- 4日 (会議) 全学教育科目責任者会議 (文系基礎科目)
- 5日 (行事) 第2回北海道大学公開講座 (全学企画)
- 6日 (会議) 全学教育科目責任者会議 (理系基礎科目)
- 6日～13日 (会議)
第2回総合教育教務・学生専門委員会 (持回り)
- 6日 (行事) 新渡戸カレッジ第2回グループ・ミーティング (14グループ)
- 7日～8日 (行事)
新渡戸カレッジ第2回対話プログラム
- 7日 (研修) プレゼンテーション入門
- 8日 (説明会) 全国国公立・有名私大相談会2018 (東京)
- 9日 (行事) 第3回北海道大学公開講座 (全学企画)
- 11日 (会議) 第4回ELMS定例会議
- 12日 (会議) 第1回学務委員会全学教育専門委員会授業評価専門部会
- 12日 (会議) 第4回オープンエデュケーションセ

	ンター連絡会議	20日 (説明会)	北海道大学入試説明会 (高校教諭対象)
12日 (行事)	第4回北海道大学公開講座 (全学企画)	20日~22日 (行事)	合同企業説明会
13日	平成31年度入学者選抜要項公表	23日 (行事)	第8回北海道大学公開講座 (全学企画)
14日 (説明会)	全国国公立・有名私大相談会2018 (大阪)	28日 (研修)	ワークショップ「初めてのシラバス作成」
16日 (説明会)	全国国公立・有名私大相談会2018 (名古屋)	27日 (会議)	第4回新渡戸カレッジ定例会
16日 (行事)	第5・6回北海道大学公開講座 (全学企画)	29日 (説明会)	全国国公立・有名私大相談会2018 (横浜)
18日 (会議)	第1回総合教育移行専門委員会	30日 (会議)	第4回学生委員会
18日 (行事)	インターンシッププレ研修第3回	31日 (会議)	IDE大学協会北海道支部理事会
19日 (会議)	第4回高等教育推進機構運営委員会		
19日 (会議)	第3回全学教育専門委員会		
19日 (行事)	第7回北海道大学公開講座 (全学企画)		

行事予定 SCHEDULE, September-December

◆9月

- 25 (火) ISP入学式
- 25 (火) 学部・学科等移行ガイダンス (午後)
- 26 (水) 学部・学科等紹介
- 27 (木) 第2学期授業開始日
- 27 (木) ~10月3日 (水)
学部・学科等移行手続き(予備志望調査)
- 27 (木) ~10月3日 (水)
抽選科目の申込期間

◆10月

- 4 (木) 予備志望調査結果発表
- 5 (金) 抽選科目の結果発表日及び追加申込日
- 9 (火) ~15 (月)
履修届Web入力
- 22 (月) ~23 (火)
履修時間割確認期間

◆11月

- 25 (日) AO入試・帰国子女入試・国際総合入試
- 26 (月) ~28 (水)
履修登録科目の取消期間

◆12月

- 3 (月) ~5 (水)
自由設計科目登録変更期間
- 27 (木) ~1月4日 (金)
冬季休業日

ニュースレター 2018, No.112 目次

(巻頭言) NITOB E教育システムの現在位置 山口 淳二 1	北海道大学入試改革フォーラム2018を開催 15
「新渡戸カレッジ」の新たな取組 —第二期プログラムの内容と特色— 3	全学公開講座「去る時代, 来たる時代を考える」 を開催しました 17
新渡戸カレッジのメンタリング・プログラムへの Speed Mentoringの導入 5	平成30年度夏季休暇中における 「全学インターンシップ」を実施中 18
学務委員会報告 8	CoSTEP, アドビと初の連携授業 「デザインスキル演習」を実施 19
TA研修会開催される —257名が修了— 8	新任紹介 21
1年生, 3年生の自習時間 —「平成29年度授業アンケート」と 「2017年度学生調査」の結果より— 12	日誌 22 行事予定 24
	目次・編集後記 25

編集後記

今年度も全学公開講座には多くの方々に参加していただきました。講義の冒頭の司会を担当するフレッシュな一年生とそれを温かい目で見守る経験豊かな参加者。その関係は、場の雰囲気をよくするのに一役買っているように思います。講師の説明に対してうんうんとうなずいたり、積極的に質問をしたりするなど、多くの経験を積んでなお懸命に学ぼうとする参加者の姿を目にすることは、入学間もない一年生にとって、勉強に対する姿勢を学ぶ貴重な機会となるはず。我々教員にとっても、大きな刺激になっています。(海苔)

ニュースレター

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)
通算 第112号

発行日： 2018年9月28日
発行元： 北海道大学高等教育推進機構
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目
編集委員：◎細川敏幸・鈴木誠・飯田直弘・岩間徳兼
ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで
電話 (011)706-7514, FAX (011)706-7521
インターネットホームページ：
<https://www.high.hokudai.ac.jp/center/>